提言

識字のありかたに関する提言

部落解放研究所識字部会

全体の構成

一　はじめに
二　識字をめぐる成果と課題
1　部落における識字運動の意義
2　これまでの成果
3　直面している課題
三　今後の識字施策に関わる提案
1　識字活動発展に向けて、行政の主体性を問いなおそう
2　隣保館（解放会館）の社会教育機能を強めよう
3　学校教員以外の講師を積極的に導入しよう
4　受講生の多様な要求を受けとめ、実験的識字関連講座を開設しよう
5　戦略的に学習要求を掘り起こそう
6　新しい発想で、学習材（教材）や手引書づくりをすすめよう
四　検討課題
1　級外学習や他地区との交流会など、行事の位置づけ
2　オガリなどの創作と練習、上演などのありかた
3　夜間中学校や公民館の日本語読み書き教室との連携のありかた
4　運営委員会の責任ともちかた
5　ケーススタディの必要性とそのありかた
五　おわりに

一　はじめに

部落解放同盟中央本部は、「中央理論検討委員会」を設けてここから提言を受け、第三期の解放運動創造

て本格的に動いている。これを受けて各地の部落解放運動は、「第三期の解放運動創造」を合言葉に、新しいスタイルの運動づくりをめざしてそれぞれの領域で活動を展開しつつあるところである。

識字運動は、この第三期の典型としてしばしば引きあいに出される。識字は典型的な自己教育運動であり、自分で自分を鍛えるという視点抜きに存在しえない。ここでは、行政に要求をぶつけ、何かを引き出すことは条件としての意味しかもたない。非識字状態にある人の立ち上がりがあって、はじめて成立する運動である。識字は自力自闘を基本としているのである。しかも、国際識字年をきっかけとして、部落の識字運動は、部落内をリードするだけでなく、夜間中学校に学ぶ在日韓国・朝鮮人一世や、公民館の識字に学ぶいわゆるニューカマー（新規渡日・帰国）の人びと、自主的な識字活動を展開する障害者の人達の識字などと連携して世界の識字運動との連帯を強めるようになっている。このような点を考えれば、たしかに識字運動は、「補償から建設へ」「解放が目的、事業は手段」「部落の中から部落の外へ」「世界の水平運動」などの言葉で語られる第三期を体現するものだということができよう。

しかし、いくら第三期の典型であったとしても、そのことは識字運動自身が順調に発展していたり、問題や課題をなんらもっていなかったりすることを意味するものではない。いや、識字問題自身に即して検討すれば、むしろ現在の部落の識字には大きな課題が山積していると言わざるをえない。たとえば、各地の部落実態調査を見ると、かなり多くの非識字者がいることは明らかである。ところが識字活動に参加しているのは、そのうちほんのひと握りでしかない。また、識字学校は開設されていても、参加者がほとんどいないという地域も少なくない。学習者がたくさん集まっている地域にあっては、そのニーズを十分満たせていないという意見がしばしば聞かれる。さらに、運動の精神を忘れ行政に依存してしまっているのではないかというきびしい指摘もある。

一九九七年三月に法切れを迎え、さまざまな事業が打ち切られることもはっきりしてきた。これをどう乗り越え、識字運動の発展をどう実現するかが問われている。「第三期の典型的運動」という評価にあぐらをかくのではなく、その評価に恥じないよう自ら道を切り開くことこそが求められているのである。

この文書は、中央理論委員会の提言を受け、各地の識字活動の実態や課題について多くの方から聞かせていただいた意見をもとに、部落解放研究所識字部会で話し合い、全国の部落における今後の識字活動のありかたについての提言としてまとめたものである。識字活動の現状は地域により大きく異なるので、この提言を生かすには、地域の状況を踏まえる必要があることは言を待たない。この文章が、部落の識字運動をいっそう発展させる叩き台になれば幸いである。

二　識字をめぐる成果と課題

部落の成人識字活動は、戦前の水平社時代からあった。しかし、本格的に識字運動として各地に広がりはじめたのは、一九六〇年代からである。九州の筑豊で始まった識字運動が、全国婦人集会（現在は、全国女性集会）などを通じて他の地域にも広がっていった。

現在全国では、六〇〇を超える被差別部落で識字学校が開かれているという調査報告がある。各学校の人数や運営状況は省略するが、一方で国際識字年をきっかけとして参加者が増え活動が幅広くなり盛り上がった地域がある反面、参加者数の伸び悩みや活動内容のマンネリ化なども出てきている。ここでは、そうして広がっていった部落の識字の特徴をまとめ、その上で、現在までの成果と課題を示すことにしたい。

1　部落における識字運動の意義

この三〇年ほどの間に発展してきた部落の識字運動の意義は、次のような点にあった。　まず第一に、「識字は解放運動の原点である」ということばが端的に示すように、活動がたえず解放運動と結び付けてとらえられてきたことである。部落の識字にあっては、識字は単に文字の読み書きを身に付けることを意味するものではなかった。生い立ちを語りあい、つづることを通して、部落差別によって自分が文字を学ぶ機会を失ってきたことを学び、部落差別を跳ね返すために文字をわがものとすることこそが追求されてきた。「奪われた文字を奪いかえす」ということばは、その象徴である。こうして生まれた「解放の自覚」や「社会的立場の自覚」こそが、解放運動や解放教育運動のすべてを通してめざすべきものとされてきた。つまり、識字に参加し文字を取り戻す営みそのものが差別との闘いであり、部落解放運動なのである。「あいうえおからの解放運動」と言われるゆえんである。

第二に、学校教育のあり方を問いかけるものとして存在しつづけてきたことをあげなければならない。「私は学校へ行かんかったから差別されんかった」このお年寄りたちのことばは、学校が部落出身者にとってどのような

場所であったかを端的に物語っている。おとなになってから読み書きを学ばなければならないのは、とりもなおさず学校教育が学力の保障を怠り、部落の子どもを差別しつづけてきたからにほかならないのである。まさに、差別の生き証人としての識字学校の存在がそこにある。

識字運動は、そんな学校の責任を問い、教師の差別性を告発して、学校こそが変わらなければならないことを訴えてきた。識字学校で学ぶ人びとの姿こそ、教師が「差別の現実から深く学ぶ」うえで出発点に置かれるべきだ。こう訴えることによって、学校教員を識字講師として獲得すると同時に、同和教育にとりくもうとする学校教員を鍛える場所として大きな役割を果たしてきた。「識字で学んだことをどう学校に返すのか」こう問われた教師たちは、学校で識字を教材化し、識字生を学校に招いて子ども達との出会いの場をつくっていった。

第三に、識字を通して多様な解放の文化が発展してきたことを見逃すことができない。識字は、文化創造の源だったのである。文字を身に付けた人びとが身体の中から紡ぎだす文章は、それ自身が生命力にあふれた詩であった。多くの人びとの作品をもとに創られた構成詩＝オガリは、文字に込められた思いをもう一度集団の力で解き放つ新しい表現形態であった。ときには正面から差別に射抜かれ、ときには差別をはねのけながら、身体のなかにしまいこまれ蓄えられてきたものに表現の場が与えられたのである。そして、ひとたび表現されるようになったとき、その表現のすべは、文字やことばだけにとどまることはできなかった。ときには演劇となり、ときには絵となって、多くの人びとの心をとらえた。三一年七ヵ月にわたった獄中生活で石川一雄さんが生み出した作品群はその典型である。識字は、表現することを通して個人を解放し、同時に多くの人びとの解放への願いをかきたててきた。

2　これまでの成果

三〇年以上にわたって発展してきた識字運動は、さまざまな成果を生み出している。ここでは、とくに識字年を挟むこの一〇年ほどの間に達成された成果をまとめておく。

第一の成果と言えるのは、識字で学んだ数多くの受講生が、自らの社会的立場に目覚め、その姿や作品、文化活動が、教育・文化状況に大きなインパクトを与えていることである。受講生たちは、解放運動の担い手として数多く育ってきている。また、識字を通して運動の大きな柱である仕事保障に関わる成果をあげている。さらに、

識字の核心でもある「生い立ち」を話し書きつづるとりくみを通して部落解放文学賞をはじめ数々の作品・文集・オガリ・構成劇などを生み出している。これらは、部落解放運動の枠を越えて、大きな影響を及ぼすにいたっている。

第二に、部落に識字問題があることを明確にし、その克服をめざして活動が全国的に高い質をもって展開されるに至っていることである。政府が「日本では識字問題を克服済みである」と国際的に主張するなかで部落の識字は、日本に識字問題があり、それへの積極的とりくみがあることを世界に証言してきた。しかも、生いたちをつづることを大切にするわれわれの識字運動は、パウロ・フレイレも感心するほどの質を備えていた。識字年をきっかけとする全国的盛り上がりのなかで、日本の識字活動を牽引してきた勢力の一つでありつづけたといってよい。

第三の成果としては、とくにこの一〇年ほどの間に活動内容が豊かになってきたことを指摘できる。たとえば各地の識字学校では、学習内容・方法・運営体制などについて革新をすすめてきた。内容については、文字ばかりにとらわれることなく、しゃべくり（話し合い）やオガリ（構成詩）、書道や絵なども取り入れてきた。学習方法としては、一対一の学習を基本としつつも全体学習や共同学習を位置づけ、学級としてのつながりを大切にする手立てがとられるようになった。また、運営体制としても、解放同盟支部が責任をもって運営し、受講生を中心とする運営委員会を設ける方向をめざしてきた。こうした努力が識字年という外からの力と一体になって、この間の識字活動の盛り上がりにつながった。

第四には、国際的な連帯の強化をあげることができる。識字年に行われた「本の航海」のプロジェクトにも参加し、北代色さんの「手紙」が「航海」によって生まれた本にも掲載されている。また、国際識字年をきっかけに韓国やタイ、マレーシアなどアジア各地の識字活動家たちと連携を強めている。国内においても、いわゆるニューカマーの人たちが部落の識字学校にくるようになり、そこからニューカマーのための識字の場が行政によって設けられるようになったという例が少なくない。ニューカマーの人たちが部落の識字にくることによって、受け入れた部落の受講生集団が活性化している面があることも見逃すことができない。

他にも多くの成果をあげることはできようが、それは『人権ブックレット37　識字運動とは』などに譲る。以下では、これからの課題に注目することにしたい。

3　直面している課題

このように大きな成果を収めてきた部落の識字であるが、同時に、最近になって改めて問題点がいくつも指摘されるに至っている。

第一にあげるべきは、地域的偏りである。近畿地方と九州地方ではある程度広く識字が展開されているが、それ以外の地域では、むしろ識字活動のない地域の方が多い。実態調査などの示すところによると、識字活動のない地域にも非識字者は少なくないのであり、そうした地域でいかに識字活動を発展させるかが重要な課題である。

第二に、すでに活動がある地域では、受講者の固定化傾向をどうするのかが問題となっている。大きく分ければ参加者には、文字の読み書きを一から学びたくてきた人、解放運動に関わるうちに文字に限らず学習の必要を感じるようになった人、趣味なども含めて自己実現のために自分なりの学習機会を求めている人という三つのグループがある。年齢層からいっても、二〇歳代の若い青年たちが参加するようになってきている。運動から識字に参加するようになった人と文字の読み書きを一から身に付けたいという人、若い人と高齢の人とでニーズがかなり異なるが、それにどう対応するか。文字に困っている人にはまだまだ参加しにくい状況があるのではないか。他方で運動から識字に参加するようになった人には、文字中心の学習がぴったりきていない。それ以外にも、新たに参加するようになった人として、渡日者・帰国者がいる。彼らを受け入れることが部落の識字を発展させることにつながるためにはいくつか注意すべき点もあるようだ。

第三に、学習内容をめぐる問題がある。これまで文字を中心にしつつも多様な学習を取り入れてきたことはよかったといえる。しかし、全体としての関連がはっきりしないままきているのではないか。たとえば、機能的識字（後述、三1を参照されたい）という視点の必要性が語られながらも、それが学習内容としてじゅうぶん具体化されていない。そのことが一方での生いたち学習中心の傾向とあいまって、学習のマンネリ化につながっている。

第四は、学習方法をめぐる問題点である。大阪などでは、一対一を中心にしてきた。実はこのかたちは初期には見られなかった。行政闘争により講師料が保障されるようになってようやく実現した方法である。ところがこのかたちが続いた結果、仲間づくりや部落問題学習が進

みにくいという問題が指摘されるようになった。それで、全体学習や共同学習が取り入れられるようになってきている。けれども、やはり中心は一対一の形である。それは、各自の学習要求に応えやすいという利点があるからであろう。しかし、今後事業の縮小により講師の確保がこれまでと同じようにはできなくなる可能性がある。また、一対一の学習スタイルには弱点もある。このスタイルのよさを活かしながら、他の方法を位置づけるための考え方が整理されるべきであろう。

第五に、講師にかかわる問題も指摘されるようになった。これまでは学校の教員がおもに講師となってきた。このままでよいのかということである。部落で識字が始まった六〇年代から七〇年代はじめにかけては、すでに述べたように学校の教育差別こそが識字生を生み出したのだという考え方から、この方向がとられた。けれども今日的に言えば、講師が学校教員に限られていることは望ましいとばかりはいえなくなってきているのではないか。たとえば、学校教員以外の講師を導入する積極性も検討すべきではないか。そうすることによって、多様な人びとのエネルギーが識字の場に持ち込まれ、講師の中心となってきた学校教員にも刺激を与えて、識字全体として活性化のきっかけになるのではないか。

第六は、運営体制に関わる諸側面である。「識字に卒業はない」と言われてきたが、一方で節目をつくる必要もあるのではないか。解放会館およびその職員の関わり方はどうあるべきなのか。解放会館そのものの役割や位置づけを新たな観点から見直す一環として、識字についても新たな位置づけが求められるようになっているのではないか。

最後に、以上六つの領域をめぐる考え方を整理するためにも、どうしても避けて通れないことがらとして、識字や行政のありかたに関わる根本的な考え方をめぐる問題がある。たとえば、識字学習を「欠落部分を埋める」という発想で進めるのか、それとも個性を開花することを中心に考えるのかで、識字のあり方が全般的に変わってくる。これまでは「差別の結果を行政が補償する」という考え方を基本に同和対策事業が進められてきた。この考え方の積極性を受け継ぎ、このプロセスに市民が参加するスタイルを発展させるべきときではないか。

実態をめぐって語られるおもな論点を挙げただけでも、以上のようにきわめて多様な内容になる。今後とるべき方向がある程度明らかになっているようなことがらもある。まだまだ議論や調査研究が必要なことがらもある。次に、今後の方向としてある程度具体的に提案でき

る点を挙げることにしよう。

三　今後の識字施策に関わる提案

ここでは、部落を中心として、今後の識字活動のありかたに対する提案を大胆に行いたい。ぜひ、ご意見をいただきたい。

1　識字活動発展に向けて、行政の主体性を問いなおそう

従来、識字は、学習者側からすれば、「差別の結果奪われてきたものを奪いかえす」という視点に立って進められてきた。このことは、行政側からすれば、「行政の差別性によって生み出された実態的差別を行政の責任において補償する」という考え方になる。この考え方を主として二つの観点から発展させる必要がある。

一つは、学習目的、識字運動のめざすものは何かという視点である。「文字を奪いかえす」という論理は、国際的に見ても評価される重要な考え方である。しかし、この論理が運動的な視点だけにとどまっていると、教育や学習の論理として発展しにくくなってしまう恐れがある。たとえば職業教育につながる内容や自然認識に関わる学習、あるいは芸術活動などが従来識字運動に十全に位置付きにくかったことなども、「文字を奪いかえす」という基本的に正しい視点を、学習や教育の論理に立って豊かに展開できなかったために生じているのではないか。社会的立場の自覚を軸としながらさまざまな方向への自己実現を追求するという観点で、学習目的を組み直すべきではないだろうか。

いま一つは、行政の責務という視点である。「行政による補償責任」というこれも正しい視点がじゅうぶん発展させられなかったために、あたかもすべてを行政が自分で行うのでなければ行政責任を果たすことにならないかのような考え方が見られた。識字講師としてボランティアを募ることなども、そのような発想によって否定されてきた。本当の意味での行政責任とは、真の意味での部落解放につながる施策を展開することである。たとえば、同和地区の内外をつなぐために、識字活動にボランティアによる市民の幅広い参加を追求することなどは、その一環としてきわめて重要であろう。行政の責務に関する議論をこのような観点から発展させるべきである。

これら二つの方向性を具体化していくうえで、国際的に広がっている機能的識字という考え方や成人基礎教育という考え方を積極的に取り入れる必要がある。機能的

識字とは、単に読み書きができるかどうかという基準でなく、複雑化・情報化が進む世の中に十分参加できるだけの生きてはたらく力のことである。また、成人基礎教育とは、読み書きだけではなく、対人関係の作り方や法律についての知識など市民として生活し、自らの権利を守るうえで必要な能力全般を育成しようとする成人教育のことである。国際的には、識字（リテラシー）よりも成人基礎教育を重視する傾向が強まりつつある。

なお、識字運動を以上のように学習や教育の論理から見直し、整理する観点が、運動としての識字のあり方の座標軸を弱めるものになってはならない。識字部会が意図しているのは、教育の論理から見直すことによって、運動としての視点と課題をいっそう明らかにすることである。けっして会館主導・講師主導の識字を求めるものではない。会館としての主体性が確立されることによって、運動側の主体性がさらに強まることをこそ期待したい。言うまでもないが、「『文字を知らない』といいきれる識字運動、解放運動をつくろう」（部落解放第六回全国識字経験交流集会、一九九三年一一月）という原点を見失ってはならない。読み書きできないために小さくなるのではなく、学び闘っていることに誇りをもつ生き方と文化をつくりあげるために各支部が識字運動に責任をもたなければならないのである。この視点が全体的に確立しているかと言えば、必ずしもそうではない。その点で、中央本部や都道府県連、各支部の指導体制を再点検する必要があるのではないか。

2　隣保館（解放会館）の社会教育機能を強めよう

部落内に建てられた隣保館や解放会館（以下、一括して隣保館と記す）は、同和対策事業を総合的に進めるために創られた施設であり、その中には多様な機能が組み込まれている。このような施設の存在は、全国的に見ても国際的に見ても誇りうるものであろう。しかし、総合的であることが、かえって隣保館の機能をあいまいなものにしてしまっている面があることも否定できない。住民の要求を受けとめるということばかりに追われ、自らの施設としての主体性を積極的に打ち出しきれなかった。また、職員の側から住民自身の自立への働きかけも十分行ってこなかった。これらの問題点がここに表れているのではないか。

この問題点は、識字にも集中的に見られる。たとえば、はじめに述べたように「識字は解放運動の原点である」という考え方がある。これは部落解放運動の側からすれば貴重な指摘である。厳しい差別の中を生き抜いてきた

人たちが自らの生いたちをふりかえって差別からの解放に目覚めていくことは、今後いっそう重視されるべきことであろう。問題は、行政や解放会館の立場からこの提起をとらえかえす姿勢が弱かったということである。「識字は隣保館事業の原点である」といった観点から諸事業を発展させていけば、隣保館の主催事業もいくらか違った展開になったのではないだろうか。

たとえば会館職員の関わり方一つをとっても、識字は運動の課題という見方にとどまっている場合には、立場性がはっきりせず、運動関係者の要請を受けて行動するにとどまる傾向が強くなる。しかし、会館としての学習活動事業という位置づけがはっきりもてるならば、それに基づいて学習者や講師と接する傾向が強まるはずである。

現在、社会教育主事をはじめ社会教育専門職員を置いた隣保館は全国的にはむしろ珍しい存在である。大阪市の解放会館などに限られるであろう。しかし、今後の隣保館の課題を考えるとき、社会教育専門職員の配置を検討することが必要となる。各地で実態に応じた要求を整理し、提出すべきである。（なお、隣保館のあるべき姿については、大阪市社会教育主事会の議論や自治労が自治研活動の一環として整理したものの中に貴重な参考となる意見がたくさん含まれている）

3　学校教員以外の講師を積極的に導入しよう

すでに述べたように、部落の識字にあっては、学校教員がおもな講師として活動してきた。そのよさを活かしながらさらに幅広い人びとに参加してもらえるようなスタイルが必要である。そのことが、学級の活性化にもつながるであろう。そのためには、教師以外の講師を位置づけることが求められる。

アメリカなどでは、成人基礎教育関連団体がボランティアのリクルートなども担当し、ボランティア講師のための手引書なども発行している。日本においても、渡日外国人を対象とする日本語教室ではボランティア講師が大きな位置を占めている。そうしたボランティアをめぐっては、たんに「安上がりの講師」として位置づけるのではなく、「ともに学ぶ」という姿勢を持った人が自ら成長するための機会として位置づける必要があるとされている。「教えようとする」人ではなく、「ともに学ぶ」という姿勢を持った人と接することによって、識字学習者もいっそう成長することが指摘されている。

部落外の公民館などで市民全般を対象に開かれている識字では学校教員以外の講師が中心になって展開されているところが少なくない。そのような識字では、主婦・退職教員・OL・学生など多様な人びとが講師となって活動している。それぞれの人たちの人生経験がそのまま学級の資源として活用され、学級の識字活動をずいぶん幅広い豊かなものにすることに役立っているということができる。講師として参加している人たちは、学習者として参加している人たちから人生について多くのことを学んでいる。それまで出会う可能性のほとんどなかった多くの市民同士が、識字活動を通して出会っているのである。こうした状況については、財政的に講師料を確保できないため、しかたなくボランティアに頼っているという面を否定できない。しかし、教師以外の講師を確保することによるプラスの効果は、なんとか部落の識字活動にも吸収してしかるべきではないだろうか。

すでに、公募によって学校教員以外の講師を募集した部落の識字も出てきている。その経験によると、市の広報紙に数行で講師募集の記事を載せただけで、一〇人を超える方たちから連絡が入ったということである。そのうちの数人がすでに講師として参加しており、彼らが学級に新鮮な空気を送り込んでくれているという。

教員以外の講師が入るにあたっては、講師集団の性格と役割が改めて問題になろう。大阪などの場合、部落が校区にある学校の教員が中心となって識字の講師を担ってきたが、それは、部落解放運動と教育との連帯を軸に、学校を含む地域全体の教育を変革しようとしてきたからである。この視点を外しては、講師集団としての責任が問われることになるであろう。

学校教員以外の講師、とりわけボランティア講師の導入に対しては、①学校や行政の責任放棄につながる、②安いものは悪い、③同情融和になる、といった考え方から批判がある。このような批判には、それぞれ正当な側面もある。たとえばここでの提案は、学校教員を講師からはずすべきだなどと主張するものではまったくない。学校教員の専門性と責任をはっきりと位置づけたうえで、識字の輪をさらに広げていこうとするものである。しかし、ボランティア論などについては、まだまだ未整理な部分も多い。この提言への意見や批判をふまえて、論議を深め、識字の発展につなげるための工夫をすすめることが必要であろう。

4　受講生の多様な要求を受けとめ、実験的識字関連講座を開設しよう

従来識字学校に期待されてきた内容の中には、他の学級・講座として独自に開設されてしかるべきものが少な

からず含まれている。たとえば、話し方やコミュニケーションに関わる学級・講座である。解放運動の女性部の役員をしている人などがとくに必要としているのは、このような学級・講座ではないか。あるいは、識字に参加するなかで芸術活動にふれる機会を得た学級生の中には、芸術活動や表現活動そのものをもっと追求したいと思っている人が少なくない。その他、はっきりと職業教育的内容を求めて識字に参加している人たちもおり、彼ら彼女らから、ときとして現在の識字のありかたに対する不満が聞かれる。この人たちの学習内容も、独自の学級・講座として発展させられてしかるべきである。

もしも解放会館や隣保館にこうした人たちのニーズに応える学級・講座が開設されていたら、彼らはそんな学級・講座に参加していたかもしれない。その意味では、これまで学級・講座といえばお茶やお華など伝統的な習いごとが主な内容となってきた点にこそ問題があるといえるのかもしれない。学級講座と言えば伝統的な習いごとが思い浮かべられる一方で識字に大きな期待が寄せられたために、生活に根差した学習要求がなんでも識字に盛り込まれていく傾向が生まれたのではないだろうか。さらに識字にいろいろな学習内容を盛り込むことがある程度成功したため、学級・講座の問題点が見えにくくなっていたことも指摘せざるをえない。識字を通して地域住民が必要としているものをつかみ、それを多様な学級・講座の開設に結びつけることが奨励されるべきである。さまざまな学習機会があって、文字の読み書きを中心とする識字はその中の一つという状態が、将来的にめざされるべき姿であろう。

けれども、ではそうした学級を開きさえすればよいかといえば、けっしてそうではない。学びたい学習内容を提供する講座があったとしても、そこでの価値観が「うまくできるものの方がえらい」という能力主義的なものだったとすれば、識字に来ているような人びとは、そこに行ったとしても満足を得られないことが多いに違いない。重要なのは、こうした学級・講座が識字と同じ視点を大切にして開設されているかどうかということなのである。識字学級で大切にされてきた視点とは、最も厳しい状況にある人が生き生きしていられる学習の場所となっているかということである。識字学級のそうした特徴を関連学級・講座に持ち込むためには、識字を体験してその雰囲気や価値観を知っている講師や学級生を中心に新しい関連講座を始めることが必要である。人的にも雰囲気としても「株わけ」といえるような発想に立って、進められるべきである。

こうした実験的識字関連講座の中には、さきの項目であげたボランティアを募ることを重要な目的とする講座も含まれるべきである。国際識字年以来、識字をめぐる啓発機会は各地で設定されるようになった。ところがそうした講座はたんに識字に関する知識や識字学習者の思いを伝えるにとどまり、残念ながら識字への参加につながるものではまったくなかった。もしもボランティアなどを通して教師以外の市民と識字を結び付けるとするなら、啓発のための講座と講師を募る活動を結び付け、識字に関する啓発講座の中に講師募集を組み込んでいくことも必要となろう。

5　戦略的に学習要求を掘り起こそう

すでに述べたように、学習参加者が固定化しているという指摘も、少なからず聞かれる。この点に関わって、学習参加者の戦略的な掘り起こしが必要だという意見もある。学習者の戦略的な掘り起こしとは、マーケティング戦略に学んだものである。潜在的なニーズの調査研究から、なぜ非識字状態にありながら学習に参加しないのかということを明らかにし、そこから現在の識字学校に欠けているものを捜し出して、新たな学級像を生み出そうとするのである。読み書きできないことを知られたくないという理由が大きいのか。時間のないことが決定的なのか。健康上の問題が大きいのか。それとも教室の人間関係が問題なのか。教師の教えかたに問題があるのか。あるいは識字活動の実際を知らないことが障害となっているのか。原因は一つに帰することができず、複雑であろう。拡大戦略のプロセスには、調査だけではなく、住民への啓発や、学習者の組織化なども含んでいる。

各地区の識字学校が中心となって、こうした学習者の掘り起こしができよう。以前は識字に来ていたが来なくなったという人、読み書きに困っていることが明らかなのに識字には来ていないという人などを対象にインタビュー調査を行うのである。場合によっては、いずれかの大学など研究機関と連携してこうした調査を実行することも検討すべきである。

なお、調査に当たっては、「すべての人が読み書き学習に来るべきだ」という姿勢を持ちながらも、直接インタビューするさいには、その姿勢が前面に出ないようにしなければならない。つまり、「なぜ来ないのですか」と尋ねることによって来ない原因を聞きだそうとするのではなく、生活全般をつかみとることにより、なぜその人が識字に来ないのかということを事実から明らかにする構えが求められるということである。〈識字実態調査のあり

方については、大阪識字年推進連絡会編集・発行『大阪識字調査実施についての提言―識字問題研究会報告書―』（一九九三年）を参照されたい〉

6　新しい発想で、学習材（教材）や手引書づくりをすすめよう

以上を受けて、識字のための学習材や手引書づくりが進められるべきである。従来「教材」という呼び方が一般的であったが、識字が学習者中心に行われるものであることを考えれば、「学習材」という呼び方に切り替えていくべきである。識字の学習材は、一対一の学習を前提にして創られるべきではない。また、教材（学習材）と言えば一枚のプリントが思い浮かべられるような教材観・学習材観は捨てられる必要がある。学習材とは、なんらかのテーマにそくした学習を進めるための手掛かりとなる活動内容や活動方法を整理したものである。たとえば、全体学習の場でみんなが楽しく参加して文字学習を深められるゲームがあるならば、そのゲームの目的ややり方などを整理したものやゲームに使う道具すべてが学習材である。したがって、学習材の単位は、一つの小さなテーマに基づいて創られた学習内容と学習活動の一塊となる。プリントや映画などのかたちをとる学習材の物的側面は、教具や学習具と呼ばれるべきであろう。

とりあえずアメリカやイギリス、南アフリカなどで開発されている講師用手引きや学習材集が参考になるものと思われる。それらを参考に部落の識字活動にふさわしいものが開発されるべきである。

四　検討課題

以上はある程度の方向性が明らかだと思われる諸点である。上にあげた六点以外にも、今後とるべき方向を検討すべき課題は多い。ここでは、項目だけを簡単にあげておこう。

1　級外学習や他地区との交流会など、行事の位置づけ

識字年以降、教室での学習以外の活動がいっそうさかんに位置づけられるようになった。ときには宿泊を含む他地区との交流会もしばしば設定されるようになった。こうした教室外の活動は識字を活発化させることにつながることが多く、おおむね好意的に評価されている。しかし、そうした活動が必ずしも識字活動の発展につながっていない場合がある。各地の成功例・失敗例を持ち寄り、成功のための条件を探るべきである。

2　オガリなどの創作と練習、上演などのありかた

一〇年ほど前から、オガリが各地でさかんに行われるようになった。「おがる」とはムラ言葉で、大声で自分の思いを語るというほどの意味であり、「オガリ」とは識字に関わる人びとが自らの経験や思いを語る群読や構成詩のことである。自らの被差別体験や運動への立ち上がりを集団活動を通して表現するオガリは、解放運動の一環として貴重である。オガリがもとになって、演劇にまで発展した地域もある。優れたオガリがたくさんつくられてきている一方、なかなかオガリができないという地域も少なくない。書かれた文章を読みながら発表していくというオガリのスタイルは、読み書きを一から学ぼうとする人にとっては難しい場合もある。これに代わるものとして、たとえば替え歌や踊りに思いを込めたりしている地域もある。これまでの作品を集約しつつ、オガリだけに囚われない幅広い舞台表現を追求すべきであろう。

3　夜間中学校や公民館の日本語読み書き教室との連携のありかた

部落の識字は、読み書きに不自由している部落出身者を対象に、読み書きを中心にだいたい週一回の割合で開かれている。それに対して夜間中学校は、義務教育を終えられなかった人びとを対象に、毎日開かれ、学習内容も読み書きだけではなく中学校の課程全体を含んでいる。文字の読み書き能力を身に付けるには、集中して毎晩でも学習を積み重ねることが望ましい。家庭など生活を抱えている学習者にとっては、逆に毎日だとかえって通いにくいという場合もある。また、部落の識字は一対一が基本となっている場合が多いのに対して、夜間中学校は教師ひとりに生徒は一〇人を超えることが多い。公民館で開かれている日本語読み書き教室は、参加者、内容、講師、条件など、いずれをとっても多様である。お互いの違いを生かしあいながら、読み書きに不自由している人たちにとってもっとも利益になるよう、今後のありかたが検討されるべきである。

4　運営委員会の責任ともちかた

大阪府下の識字学校のほとんどには、すでに運営委員会が作られ、定期的に会合を開いている。解放同盟の支部が責任をもち、識字生代表や解放同盟女性部の担当者が運営委員会に入ることによって、識字生の要求が置き去りになることを防ぎ、識字生の参加を真の意味で実現

することが可能となる。識字生の年齢格差も大きくなっており、高齢層と若年層を結び付けるためにも、運営委員会が重要になる。ともすれば受講生が講師に対してへりくだった関係がはびこりかねない。運営委員会は、講師と生徒の関係に表れたこうした歪みを点検し、対等な関係を発展させるためにも不可欠である。地域によっては、運営委員会の下に教材作成委員会や識字ニュース編集委員会などが設けられ、活発に活動を行っている。このような経験を交流しあい、運営委員会のもつべき役割とそのもちかたを明確化すべきである。

5　ケーススタディの必要性とそのありかた

識字の成果は主として学習者の書いた文章として残されている。学習者の文章の中には、一人ひとりの人生がこめられている。しかもそれらは、もし彼ら彼女らが識字に関わらなければ残ることのなかった歴史の重要な一コマを証言しているのである。こうした文章の価値は、いくら語っても語り過ぎることはないであろう。残念なのは、文章が書かれた背景についての情報がほとんど残されていないことである。書かれた内容だけでは分からないその人の人生、その人が書くにいたった経緯、講師としての関わりかた、その人の読み書き学習の経過など、書き残されるべきことはたくさんある。講師の側にも書くことがもっと求められるべきである。

五　おわりに

識字は解放運動の一環として発展してきた。この提言で述べてきたことをひとことで言えば、運動の一環としてあった識字を教育や行政が主体的にどう受け止めるべきかということになる。「第三期の解放運動」という提起を受け、解放運動の側も、行政や教育に識字をめぐる真の主体性を求めていくよう努めなければならない。

識字のありかたやそれをとりまく環境は、地域によってずいぶん異なる。以上に述べてきたような問題意識が当てはまらない地域も少なくないに違いない。しかし、「識字活動をいっそう発展させたい」という願いが根底にあるかぎり、条件や必要とされるものは異なっても、それぞれが将来像を考えるにあたってヒントとなることがらも含まれているのではないか。部落解放研究所識字部会では、そのような期待を込めて、この提言を皆さんにお届けしたい。ぜひ多くの方からの批判とご意見をお寄せ願いたい。